

# 国語科学習指導案

令和元年11月8日（金）第6校時 14:45~15:30

3F多目的教室 指導者

- 1 単元名 筆者の工夫を読み解き、それを生かして絵画作品の解説文を書こう  
教材名 『鳥獣戯画』を読む」「この絵、わたしはこう見る」（光村図書6年）  
【補助教材】「12世紀のアニメーション」高畑 勲 （徳間書店）他

## 2 身に付けさせたい資質・能力及び児童の実態

身に付けさせたい資質・能力		児童の実態
知識・技能	語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使う力	
思考力・判断力・表現力等	○目的に応じて、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりする力 ○目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想・意見を区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する力	
主体的に学習に取り組む態度	必要な情報を読み取って伝え合うことに見通しをもって粘り強く取り組むとともに、絵から読み取ったことが効果的に伝わる文章を書こうとする態度	

## 3 教材観

### （1）単元構想について

本単元は、児童の追究意欲の高まりや学習内容のつながり等、学びの過程や連続性を考慮し設定した、「読むこと」「書くこと」の複合単元である。まず、第一次で扱う『鳥獣戯画』を読むを、児童がより良い解説文を書くためのモデル文として位置付け、筆者のものの見方や表現の工夫について読み取らせる。その後続く教材「この絵、わたしはこう見る」を扱う第二次において、第一次で読み取った内容を生かし、自分の選んだ絵画作品の解説文を書かせるといった単元構想となっている。

### （2）教材及び学習活動の概要について

第一教材『鳥獣戯画』を読むは、アニメーション監督高畑勲氏が、十二世紀末に生み出された「鳥獣人物戯画」甲巻の一場面について、独自の見方で解説を述べている説明的文章である。筆者は絵の全体、あるいは部分について、形や大きさ、筆さばき等を細部にわたって解説し、多様な言葉で評価している。また、語りかけるような文末や体言止め、比喩表現、一枚の絵をあえて切り離れた提示方法等、自分のものの見方が読者に分かりやすく伝わるよう、書きぶりも工夫されており、児童が、筆者の論の進め方について考えたり、感じたことを表す表

現の効果や構成の工夫について学んだりするのに適した教材と言える。

何より、本教材の特徴は「鳥獣戯画」を「見る」ではなく「読む」とした、その題名にある。「読む」には、「見る」とは異なり、絵の中の物語やそこに描かれているすばらしさを読み取るなど、多くの意味が込められている。二つの語の違いに触れることで、筆者の意図に気付かせるとともに、児童にも、自身が選んだ絵画作品を解説する際には、表層の捉えのみならず、「どこに着目し」「どう表現するか」といった、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫等について考えさせていきたい。その前提として本単元では、「絵を『読む』際のものの見方」を「形や色・線、様子・大きさ・表情やポーズ等への着眼点及びそれについての解釈・評価」、「表現の工夫」を「文末表現や比喩表現、文章構成等の工夫」と捉え、「解説文」を「絵画のどこに着目したか、それをどう解釈・評価したかを明らかにし、それを読み手に伝えるために工夫した文章」とする。

第一次では、まず、筆者が記した他の解説文との比較や順番を入れ替えた本教材文との比較を行う。情報を比較・分類、関係付けることで、絵から分かること（事実）と筆者の解釈・評価（感想）の関係や、筆者の巧みな文章表現、論理構成の工夫等に自然と気付くのではないかと思われる。また、「自分も筆者のように書いてみたい」という意欲や「自分の解説文に生かすために、筆者の工夫を読み解こう」という読みのめあてをもたせていく上でも有効な手立てと考える。

第二次では、前段階で学び得た、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫といった知識を活用する場面として、本単元の主たる言語活動として位置付けた「筆者の工夫を読み解き、それを生かして絵画作品の解説文を書こう」に取り組みさせる。このような「芸術作品のよさを文章に表すこと」は、国語科だけでなく図画工作科の鑑賞でも求められるところであるが、国語科で扱うことを勘案し、自分の思いの表出に加え、「目的や意図に応じて伝えたいことを明確にして書くこと」「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して書くこと」の2点を重点化し、教科の特性に即した言語活動の展開に配慮する。

まず、教師の示した解説文を書き換える。次に、班で話し合いながら「風神雷神図屏風」の解説文を書く。そして単元の最後に、これまでの学習で得た知識を活用して、自分が選んだ絵画作品の解説文を書くといった、「書く」ことを中心とした活動を行う。教師の示した不完全な文章を書き換えさせることで、解説文に必要な、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫に改めて気付かせたい。また班での話し合いを通して、書き手によってものの見方や、表現の仕方が多様であることを実感させるとともに、それを、解説文を書く際の、自身のものの見方や表現の工夫として拡張・深化させていくことを目指す。

なお、児童が使用する絵画作品は、教科書 P150「この本、読もう」で紹介されている本の中から選定した。「筆運びや色彩が特徴的」「多様な解釈ができる」「物語が想像しやすい」という3点を選ぶ基準とし、いずれかを満たす作品の中から児童が興味をもって解説文を書けると思われるものを選んでいく。

#### 4 目標

筆者のものの見方や表現の工夫を捉えるとともに、それを生かして絵から読み取ったり感じたりしたことについて表現の効果を工夫し書くことができる。

【指導事項：B 書くこと（ウ） C 読むこと（ウ）】

#### 5 評価規準

##### 【関心・意欲・態度（ア）】

必要な情報を読み取って伝え合うことに見通しをもって粘り強く取り組むとともに、絵から読み取ったことが効果的に伝わる文章を書こうとしている。

##### 【書く力（イ）】

絵から読み取ったり感じたりしたことについて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。

##### 【読む力（ウ）】

目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりしている。

##### 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（エ）】

語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使っている。

## 6 単元の構想

次	時	学習活動	評価	指導方針 他（*）
1	1	P137 の絵から読み取ったことを文章に表し、教材文と比べることで、自分と筆者のものの見方や表現の仕方の違いに気付く。	ア	自身の文章と教材文を比較させることで、筆者のものの見方や表現の工夫に気付かせるとともに「筆者の工夫を読み取って、自らの書き方に生かす」という、単元全体の学習の見直しをもたせる。 【主】
	2	全体を序論・本論・結論に分けたり、文章構成を図式化したりして構成や筆者の意図を捉える。	ウ	文章全体を三つに分けさせたり図式化させたりすることで、構成や筆者の意図をつかませる。 【対】
	3 本時	P137 の挿絵を基に事実と解釈・評価（感想）の関係を捉え、筆者の表現の工夫に気付く。	ウ	教科書本文と、第1時で書いた自身の解説文や筆者が別の本に書いた『鳥獣戯画』の解説文を比較させて、絵の事実部分と筆者の解釈・評価（感想）を区別させたり、表現の工夫に気付かせたりする。 【対】【深】
	4	P139 の挿絵を基に表現や構成の工夫について読み取り、その効果について考える。	イ	順序を入れ替えたり、削除したりした文章と教材本文を比較させ、段落内の論理構成の工夫を捉えさせるようにする。 【対】【深】
	5	「鳥獣戯画」を人類の宝とした筆者の主張について自分の考えをまとめる。	ウ	筆者が「『鳥獣戯画』は人類の宝」だとした根拠を「自由闊達」「保存」という具体的な言葉で関係付けて説明していることを押さえる。 【対】【深】
2	6	教師が示した解説文を、第一教材で学んだ、絵を「読む」際のものの見方や表現の工夫等を基にして書き換える。	イ エ	教師が意図的に、ものの見方や表現の工夫が表れていない解説文を提示することで、解説文を書く際に必要な要素に気付かせるとともに「筆者の工夫を読み取って、自らの書き方に生かす」という、単元全体の学習の見直しをもたせる。 【主】
	7	班で話し合い『風神雷神図屏風』についての解説文を書く。		班で話し合い、一つの解説文を書かせる。また赤と青のペンで色分けをさせ、ものの見方や表現の工夫がどこに採り入れられているか可視化させる。 【対】
	8 9	自分の好きな絵画作品を一つ選んで解説文を書き、絵を「読む」際のものの見方や表現の工夫等を紹介する。	イ エ	同じ絵画作品を選んだ児童同士、違う絵画作品を選んだ児童同士で交流させて、ものの見方や表現の工夫の共通点や違いに気付かせ、解説文の材料にさせたり、ものの見方を広げさせたりする。 【深】

【課外】 3階廊下に、おすすめ絵画作品とともに各自の解説文を掲示する。

（※）【主】【対】【深】…「主体的・対話的で深い学び」のそれぞれの視点  
【教】…教材・教具の工夫 【家】…家庭学習との連動

7 本時の展開

(1) 本時の目標

教科書教材本文と、自分が書いた解説文や筆者が他の書籍に寄せた「鳥獣戯画」の解説文を比較することを通して、事実と解釈・評価（感想）の関係を捉えるとともに、筆者の表現の工夫に気付くことができる。

(2) 準備

教師：教科書、フラッシュカード、大型モニター、教師用タブレット、教材本文拡大模造紙、ペン、「鳥獣戯画」解説文別資料

児童：教科書、ノート、辞書

(3) 展開

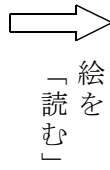
主な学習活動	時間	支援及び留意点	評価・評価後の指導と支援
1 本時の学習課題を確認する。	3	「読者の立場から読んだときに、分かりやすいか、読みたくなるか」という観点で文体的特徴を検討することを伝え評価の視点をもたせる。	
<p><b>単元の目標：筆者の工夫を読み解き、それを生かして絵画の解説文を書こう。</b></p>			
<p><b>本時の課題：高畑さんの書き方の工夫を探り、その効果を考えよう。</b></p>			
2 第1段落の文章を読み表現の工夫について考える。	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に多くの児童が感想に書いた「実況中継みたい」という言葉を手がかりに第1段落の書きぶりについて全体で考えさせる。</li> </ul>	
3 教材本文（A）と筆者が他の書籍に書いた「鳥獣戯画」の解説文（B）を比較しながら、第2段落の表現の工夫について考える。	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2つの文章の違いを手がかりに事実と解釈・評価（感想）の関係を捉えさせるとともに、筆者の表現の工夫にも気付かせる。</li> <li>・話し合いの際には               <ul style="list-style-type: none"> <li>①（A）にはあるが（B）にはない箇所</li> <li>②同じようなことを言っているのに、書き方が違う箇所</li> <li>③その他</li> </ul>               といった視点を与え、それぞれの線種を分け、模造紙に書き込ませる。また①については「筆者はなぜそのように書き表したのか」という理由についてもなるべく考えさせるようにする。             </li> </ul>	<p>目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりしている。</p> <p style="text-align: right;"><b>【読む力】</b></p>
4 筆者のものの見方や表現の工夫にはどんなものがあつたか、全体で共有する。	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「他の班との共通点（相違点）は何か」「どの班と似ているか」「全ての班の気づきをまとめるとどうなるか」等、発問を焦点化する。</li> </ul>	
5 筆者の主張が含まれている第9段落と第1・2段落の表現の工夫との関係性に気付く。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「鳥獣戯画」を「人類の宝」と主張する筆者の意図が伝わるような、文章の書かれ方がなされているか押さえる。</li> </ul>	
5 本時の学習を振り返る。	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次時は P139 の挿絵にどのようなものの見方や表現の工夫がなされているか読み解くことを伝え、具体的な見通しがもてるようにする。</li> <li>・指導事項に沿った振り返りの観点を示し、記述・発表させる。</li> </ul>	

(4) 板書計画

霜月／8  
『鳥獣戯画』を読む

めあて

高畑さんの書き方の工夫を探り、その効果を考えよう。



教材本文

他教材の文章

一段落目  
表現の工夫

- ・ 相撲用語
- ・ 実況中継のよう
- ・ 言葉が短い
- ・ 例えがある

場面の描写

二段落目

取り上げたもの

- ・ トノサマガエルと兎

どこを見て

- ・ 筆づかい(線)
- ・ 部分や全体

どんな言葉で

- ・ のびのびと
- ・ 生き生きと
- ・ 見事な
- ・ 気品
- ・ まるで人間みたいに

絵の描かれ方についての説明と感想

ふりかえり

+

### (1) 単元構想について

本単元は、児童の追究意欲の高まりや学習内容のつながり等、学びの過程や連続性を考慮し設定した、「読むこと」「書くこと」の複合単元である。まず、第一次として、児童がより良い解説文を書くためのモデル文として『鳥獣戯画』を読む』を第一教材に位置付け、筆者のものの見方や表現の工夫について読み取らせる。その後、第二次として、前段階で読み取ったものを生かし、第二教材として設定した「この絵、わたしはこう見る」で自分の選んだ絵画作品の解説文を書かせるといった単元構想となっている。

### (2) 教材について

第一次で扱う第一教材『鳥獣戯画』を読む』は、アニメーション監督高畑勲氏が、十二世紀末に生み出された「鳥獣人物戯画」甲巻の一場面について、独自の見方で解説を述べている説明的文章である。筆者は絵の全体、あるいは部分について、形や大きさ、筆さばき等を細部にわたって解説し、多様な言葉で評価している。また、語りかけるような文末や体言止め、比喩表現、一枚の絵をあえて切り離れた提示方法等、自分のものの見方が読者に分かりやすく伝わるよう、書きぶりも工夫されており、児童が、筆者の論の進め方について考えたり、感じたことを表す表現の効果や構成の工夫について学んだりするのに適した教材と言える。

何より、本教材の特徴は「鳥獣戯画」を「見る」ではなく「読む」とした、その題名にある。「読む」には、「見る」とは異なり、絵の中の物語やそこに描かれているすばらしさを読み取るなど、多くの意味が込められている。二つの語の違いに触れることで、筆者の意図に気付かせるとともに、児童にも、自身が選んだ絵画作品を解説する際には、表層の捉えのみならず、「どこに着目し」「どう表現するか」といった、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫等について考えさせていきたい。そこで本単元では、絵を『読む』際のものの見方を、「形や色・線、様子・大きさ・表情やポーズ等への着眼点及びそれについての解釈・評価」と定義付けた。また、表現の工夫を、「文末表現（語りかけるような文末や体言止め）、比喩表現、文章構成等の工夫」を指すものとした。そして、解説文を「絵画のどこに着目したか、それをどう解釈・評価したかを明らかにし、それを読み手に伝えるために工夫した文章」とした。

これらを踏まえて構成した第一次では、筆者が記した他の解説文との比較や順番を入れ替えた本教材文との比較を行う。情報を比較・分類、関係付けることで、絵から分かること（事実）と筆者の解釈・評価（感想）の関係や、筆者の巧みな文章表現、論理構成の工夫等に自然と気付くのではないかと思われる。また、「自分も筆者のように書いてみたい」という意欲や「自分の解説文に生かすために、筆者の工夫を読み解こう」という読みのめあてをもたせていく上でも有効な手立てと考える。

第二次では、『鳥獣戯画』を読む』で学び得た、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫といった知識を活用する場面を設定する。具体的には、本単元の主たる言語活動として位置付けた「筆者のものの見方や表現の工夫を読み解き、それを生かして絵画作品の解説文を書こう」に取り組ませる。この「芸術作品のよさを文章に表す」活動は、国語科だけでなく図画工作科の鑑賞でも求められるところであるが、国語科で扱うことを勘案し、見たものや自分の思いの表出だけでなく、「目的や意図に応じて伝えたいことを明確にして書くこと」「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して書くこと」の2点を重点化することで、教科の特性や先の指導事項に沿った言語活動となるよう配慮する。

具体的には、最初に、教師の示した解説文を書き換える。次に、班で話し合いながら「風神雷神図屏風」の解説文を書く。そして単元の最後に、これまでの学習で得た知識を活用して、自分が選んだ絵画作品の解説文を書くといった、「書く」ことを中心とした活動を行う。教師の示した不完全な文章を書き換えさせることで、解説文に必要な、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫に改めて気付かせたい。また班での話し合いを通して、書き手によってものの見方や、表現の仕方が多様であることを実感させるとともに、それを、解説文を書く際の、自身のものの見方や表現の工夫として拡張・深化させていくことを目指す。

なお、児童が使用する絵画作品は、教科書 P150「この本、読もう」で紹介されている本の中から選定した。「筆運びや色彩が特徴的」「多様な解釈ができる」「物語が想像しやすい」という3点を選ぶ基準とし、いずれかを満たす作品の中から児童が興味をもって解説文を書けるとと思われるものを選んでいく。

### (1) 単元構想について

本単元は、児童の追究意欲の高まりや学習内容のつながり等、学びの過程や連続性を考慮し設定した、「読むこと」「書くこと」の複合単元である。まず、第一次として、児童がより良い解説文を書くためのモデル文として『鳥獣戯画』を読む』を第一教材に位置付け、筆者のものの見方や表現の工夫について読み取らせる。その後、第一次で読み取った内容を生かし、第二教材として設定した「この絵、わたしはこう見る」を扱う第二次において、自分の選んだ絵画作品の解説文を書かせるといった単元構想となっている。

### (2) 教材及び学習活動の概要について

第一教材『鳥獣戯画』を読む』は、アニメーション監督高畑勲氏が、十二世紀末に生み出された「鳥獣人物戯画」甲巻の一場面について、独自の見方で解説を述べている説明的文章である。筆者は絵の全体、あるいは部分について、形や大きさ、筆さばき等を細部にわたって解説し、多様な言葉で評価している。また、語りかけるような文末や体言止め、比喩表現、一枚の絵をあえて切り離れた提示方法等、自分のものの見方が読者に分かりやすく伝わるよう、書きぶりも工夫されており、児童が、筆者の論の進め方について考えたり、感じたことを表す表現の効果や構成の工夫について学んだりするのに適した教材と言える。

何より、本教材の特徴は「鳥獣戯画」を「見る」ではなく「読む」とした、その題名にある。「読む」には、「見る」とは異なり、絵の中の物語やそこに描かれているすばらしさを読み取るなど、多くの意味が込められている。二つの語の違いに触れることで、筆者の意図に気付かせるとともに、児童にも、自身が選んだ絵画作品を解説する際には、表層の捉えのみならず、「どこに着目し」「どう表現するか」といった、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫等について考えさせていきたい。その前提として本単元では、絵を「読む」際のものの見方を「形や色・線、様子・大きさ・表情やポーズ等への着眼点及びそれについての解釈・評価」、表現の工夫を「文末表現（語りかけるような文末や体言止め）、比喩表現、文章構成等の工夫」と定義付けるとともに、解説文を「絵画のどこに着目したか、それをどう解釈・評価したかを明らかにし、それを読み手に伝えるために工夫した文章」と捉えることとする。

第一次では、まず、筆者が記した他の解説文との比較や順番を入れ替えた本教材文との比較を行う。情報を比較・分類、関係付けることで、絵から分かること（事実）と筆者の解釈・評価（感想）の関係や、筆者の巧みな文章表現、論理構成の工夫等に自然と気付くのではないかと思われる。また、「自分も筆者のように書いてみたい」という意欲や「自分の解説文に生かすために、筆者の工夫を読み解こう」という読みのめあてをもたせていく上でも有効な手立てと考える。

第二次では、「『鳥獣戯画』を読む』で学び得た、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫といった知識を活用する場面として、本単元の主たる言語活動として位置付けた「筆者のものの見方や表現の工夫を読み解き、それを生かして絵画作品の解説文を書こう」に取り組ませる。「芸術作品のよさを文章に表すこと」は、国語科だけでなく図画工作科の鑑賞でも求められるところであるが、国語科で扱うことを勘案し、自分の思いの表出に加え、「目的や意図に応じて伝えたいことを明確にして書くこと」「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して書くこと」の2点を重点化し、教科の特性に沿った言語活動を展開する。

最初に、教師の示した解説文を書き換える。次に、班で話し合いながら「風神雷神図屏風」の解説文を書く。そして単元の最後に、これまでの学習で得た知識を活用して、自分が選んだ絵画作品の解説文を書くといった、「書く」ことを中心とした活動を行う。教師の示した不完全な文章を書き換えさせることで、解説文に必要な、絵画作品を「読む」際のものの見方や表現の工夫に改めて気付かせたい。また班での話し合いを通して、書き手によってものの見方や、表現の仕方が多様であることを実感させるとともに、それを、解説文を書く際の、自身のものの見方や表現の工夫として拡張・深化させていくことを目指す。

なお、児童が使用する絵画作品は、教科書 P150「この本、読もう」で紹介されている本の中から選定した。「筆運びや色彩が特徴的」「多様な解釈ができる」「物語が想像しやすい」という3点を選ぶ基準とし、いずれかを満たす作品の中から児童が興味をもって解説文を書けるとと思われるものを選んでいく。